

西行における遁世

——『山家集』より——

沼波政保

はじめに

中世隠者文学の担い手としては、西行・長明・兼好が夙に著名である。この三者が、すべて「隠者」という言葉で括れるかということはさておき、その中、西行は「花と月の歌人」と言われる。果たして彼の和歌において「花」および「月」はいかなるものであったか。さらに彼にとって詠歌はいかなる意味を持っていたのか。ひいては彼において仏道修行とはいかなるものであったのか。そこに「隠者文学」の特性を見出すことはできないのか。

このような問題を考える時、その前段階として、和歌を通してうかがいうる西行について概観しておかねばな

らない。

拙稿は、上述の如き意図のもとに、『山家集』を通してうかがいうる西行における遁世を概観するものである。

—

まず、西行の草庵生活についてみてみよう。

西行は、草庵にはあまり居なかつたようである。

捨てたれど隠れて住まぬ人になれば猶世にあるに似たる成けり⁽¹⁾（一四一六）

その西行の草庵の様子は、「すみける谷に」（二七・詞書）・「いほりの前なりける梅をみて」（三九・詞書）・「跡たえて浅茅しげれる庭の面に」（一五九）などといったところからうかがえるが、あまり詳しくは述べられてはいず、それは「柴の庵」（四〇・七二五・九五〇）・「柴囲ふ庵」（九六五）などといった、通常のな表現である。つまり、西行の草庵生活について、具体的にみられるものは少ないが、おそらくその当時の草庵と同様であったのではなからうか。『撰集抄』にみられる草庵を考えて大きな誤りはなからうと思われる。

さて、和歌をみるかぎり、世を遁れた西行の草庵生活は、甘美なものとして表現されている。

草庵には花が満ちている。

・しばのいほにとくく梅の匂ひきてやさしき方もある住家哉（四〇）

・ちる花の庵のうへをふくならば風いるまじくめぐりかこはん（一三八）

たとえ草庵の場所はあちこちと変わっても、花へ寄せる心に変わりはない。出家してからは、俗人の頃とはまた違ったものであったであろうが、「花にそむ心」は、遁世したはずではあっても、やはりそれを失うことはなかった。

花にそむ心のいかで残りけむ捨て果ててきと思ふ我身に（七六）

彼はまた、月にも心をひかれた。

うちつけにまた来む秋の今宵まで月ゆゑをしくなるいのち哉（三三三）

月の美しさそのものにひかれた時、突然に生への執着心が起きた、そのことに対する西行の驚きをうかがうことができる。

捨てて往にし憂世に月のすまであれなさらば心の留らざらまし（四〇五）

月に執着しているわが身であると、彼には認識されていたがゆえに、現実にはありえないことを願うのである。

さらぬだにうかれてものを思ふ身の心をさそふ秋の夜の月（四〇四）

月に心を奪われる身を反省してはいるが、「うかれてものをおもふ」心はどうしようもなく、押えることができない。遁世したと思っても、花鳥風月をめぐる心は、彼の胸中から去りがたいものであった。

そのような心は、遂には、

ねがはくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月の頃（七七）

と、彼岸桜のもとで釈迦入滅の日に死にたいという、極めて甘美な、幻想的とさえいいうる憧憬となるのである。そこには、道心堅固な遁世者というにはあまりにも異なった美しさがある。あの世の蓮華ではなく、この世の美の象徴とも言いうる桜の花の下で死にたいと願う。死後までも現世の美の延長を望んでいたのだと考えられる。しかも、釈迦入滅の日に死にたいということは、悟りの境地をも願望している。花への執着と悟りの境地とは両立しえない。その矛盾するものを一つにしたい。これが西行の、死後までの課題であったのである。

また、西行が花や月を詠んだ歌をみてみれば、自省のうかがわれる歌をはじめとして、そこには絶えず自分が問題とされている。自分自身が主体である。ここに、やはり遁世者としての、おのれを厳しくみつめるといふ姿勢をみることができるのである。

二

そのような西行は、また、草庵生活のさびしきというものも味わっている。

・庵にもる月の影こそ淋しけれ山田は引板のおとばかりして(三〇三)

・花も枯れ紅葉も散らぬ山里は淋しさをまた訪ふ人もがな(五五七)

わがさびしさを慰めに訪れて来る人を願っているのではない。さびしさを好む人が、そのさびしさを求めてやってくることを願っているのである。

・木の間洩る有明の月をながむれば淋しさ添ふる嶺の松風（三四五）

・水のおとは淋しき庵の友なれや峯のあらしの絶え間くくに（九四四）

水の音さえも友とせねばならないさびしさである。

さびしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里（五二三）

「さびしさにたへたる人」、つまり、じつとさびしさをこらえている人（自分もそうであるが）は、同じ境遇だけになつかしく、そのような人と庵をならべて住みたいというのである。庵をならべるといっても、お互いに慰め合うというのではない。お互いの交流はなくてもよい、この同じ冬の山里に、「さびしさにたへたる人」たる自分と同じような人が、やはり「さびしさにたへ」ていてほしい、さびしさを共にする人が居さえすればよい、というのである。

とふ人もおもひ絶えたる山里の淋しさなくば住み憂からまし（九三七）

一般の間人からみると、瘦我慢のようにも聞こえるが、世間の価値観を捨てて別の価値観に立つのが隠遁であると考えると、割りに素直な表現ではないかと受けとれるのである。さびしさこそ楽しみなのだ。さびしさゆえに花鳥風月の美しさがより美しくなるのであるとみており、この点から見ると、先に掲出した

ねがはくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月の頃（七七）

の歌も、草庵の苦しきからほとばしり出た西行の人生の完結を願うものとみることができよう。

このような、西行と自然との関係には、互いに一つに溶け合おうとする融合感をみることができる。

水のおとは淋しき庵の友なれや峯のあらしの絶え間く（九四四）

水の音と自己との友情的な感情がみられる。

ひとり住む庵に月の射しこずばなにか山辺の友にならまし（九四八）

月だけが友である。

こ、をまた我住み憂くて浮かれなば松は独にならんとすらん（一三五九）

松との対話によって、孤独がなぐさめられている。

松風の音あはれなる山里に淋しさ添ふるひぐらしの声（九四〇）

では、対話の構造ではなく、ひぐらしに自分と同じさびしさをみており、自分のさびしさとひぐらしのさびしさとが一つに溶け合っている。

わび人のなみだに似たる桜かな風身にしめばまづこぼれつつ（一〇三五）

も同様に捉えることができよう。

このように、水の音・月・松・ひぐらし・桜などが友となっており、その時その時そのみか友だというのが、西行はそれらすべてを友としている。総体として自然を友としていたのである。

我々は、世を捨て切った西行を想像しやすいが、少なくとも歌の表面上でみるかぎりでは、西行は世を捨て切つてはいないようである。

・すてたれど隠れて住まぬ人になれば猶世にあるに似たる成けり（一四一六）

・世中を捨てて捨て得ぬこゝちして都離れぬ我身成けり（一四一七）

そしてまた、秋の月を眺めるにつけても、世の移りゆくすがたに、心が痛まずにはいられない。

・何ごともかはりのみゆく世の中におなじ影にてすめる月哉（三五〇）

・ながむればいなや心の苦しきにいたくな澄みそ秋の夜の月（三六七）

秋の月はいつも変りなく澄みきつてかがやいているのに、それにひきかえ、この世の移りゆくすがたはどうだ。

この世は諸行無常なることを知ってはいるが、西行の周囲もその例外ではなかった。保元の乱に敗れると、崇徳上皇は仁和寺へ入って出家された。

世中に大事出で来て、新院有らぬ様にならせおはしまして、御髪下して、仁和寺の北院におはしましけるにまゐりて、兼賢阿闍梨出で会ひたり。月明くて詠みける。

かゝる世に影も変らず澄む月を見る我身さへ恨めしきかな（二二二七）

彼の仕えていた徳大寺家の実能の妹は待賢門院、つまり上皇の母である。このような、身近な人々の転変に加えて、貴族社会の没落、新しい時代の前兆たる不安定な世情に、西行は社会基盤の揺れ動く感を抱いた。前掲の三五〇・三六七の歌は決して観念的な詠ではなく、変動極まりない当時の世相の体験の裏付けからのものである。

秋の色は枯野ながらもあるものを世の儂さや浅茅生の露（七六七）

このような西行は、人生への果てしない思いを抱き続けた。

風に靡くふじの煙の空に消えて行方も知らぬわが思ひ哉（『新古今集』一六一三）

文治二年（一一八六）、六十九歳で陸奥へ旅した時の歌である。「ゆくへも知らぬわが思ひかな」という、人生・妻・子への果てしない思い。遁世してからすでに四十数年、ここまで来ても俗世への思いが断ち切れない。人生の終極に近づいても、人生との関係は断ち切れないのである。

この人生への思いは、人生とは何であるのかという問いでもあったのである。

心なき身にも哀はしられけり鳴たつ沢の秋の夕暮（四七〇）

「鳴たつ」については二説あるが、⁽²⁾ここはやはり鳴が飛び立つ意に解すべきであろう。つまり、鳴がそこに居れば対話もできようが、飛び立ってしまえばそこには孤独しかない。鳴が飛び去ってしまうことによって、より「あはれ」・さびしさを感じさせる。すなわち、この歌は絶対的孤独を詠ったものである。西行の、時代への寒々とした思いが、底にみられるのである。

この歌は、

・ちるをみで帰る心や桜花むかしにかはるしるしなるらん（一〇四）

・花を見しむかしの心あらためて吉野の里に住まんとぞ思ふ（一〇七〇）

などの歌から、陸奥への二度目の旅の時で晩年の詠であり、また、老いるにしたがって心境の変化をみることができることから、「心なき身」とは風流を解しない身という意味であろうと考えられる。しかしそれは、へりくだった態度とは違う。すなわち、「心なき身」というのは、単に世を捨てたから心がないというのではなく、そうではあるが、乱世に生きる彼としては、「心なき身」とならざるをえない、「心なき身」を装おうと懸命にならざるをえないのではなからうか。世のはかなさ・転変の中に生きる身としては「心なき身」とならざるをえないのである。³⁾

しかし、「心なき身」にも「あはれ」は感じるのである。そこに、「心なき身」に徹しきれない西行のすがたを見るのである。このように徹しきれないというのも、彼が自分自身を厳しくみつめた結果の、正直な告白である。自分を眺めずして生きる人には、このような自己の内に大きな矛盾を抱くことはできない。自分自身を遁世者として常に厳しくみつめ、内省し続けて、しかも彼は俗世への断ち切れない想いの矛盾に悩む。そこに彼の、他の人とは違った点を見出しうるのである。先に、少なくとも歌の表面上でみるかぎりでは西行は世を捨て切つてはいないと述べたが、それは実は彼の苦悩の正直な告白であつて、その底には懸命に遁世者たりえようとする心がもがいているのである。

そのような「心なき身」（心と身との分裂）であつては、草庵にじつと落ち着くことはできなかつた。草庵に

いても、心と身との分裂、換言すれば世の転変とそれへの執着から、西行は旅へと出かけずにはいられなかった。

・かへれども人のなさけに慕はれて心は身にも添はずなりぬる（九二八）

・柴囲ふ庵のうちは旅だちてすどほる風もとまらざりけり（九六五）

この心の二面の背律から、西行は草庵に落ち着くことができず、旅へと出たのである。

何處にもすまねばたゞすまであらん柴の庵のしばしあるよに（『新古今集』一七七八）

「たゞすまであらん」は自暴自棄ともみえる否定の極限の表現である。しかし、この絶対の否定を通り超さずして絶対の肯定、つまり本来の意味の精神的安定は得られないのである。

四

このように述べてくると、西行は歌人・詩人なのか、それとも隠遁者なのかという疑問が生じてくるわけであるが、その前に彼の仏教的精神はどのようなものであったか、見ることにしよう。

彼はいろいろな寺の勧進をしており、和歌にも、『山家集』には「釈教十首」をはじめ、法華経の各品や般若心経・無量寿経・千手経・摩訶止観・六道などを詠んだものもみられるが、「西行」という法号⁴が西方極楽浄土を願う浄土教思想にもとづいていることから明らかのように、やはり当時の仏教観と同じく、西方願生の心を詠んだものもみられる。

・わが宿は山のあなたにある物をなかに憂世を知らぬこゝろぞ(七一六)

・西を待つ心に藤をかけてこそそのむらさきの雲をおもはめ(八六九)

・山端に隠る、月をながむればわれと心の西に入るかな(八七〇)

・西へ行月をや餘所におもふらん心にいらぬ人のためには(八七二)

しかし、それよりも彼は、無常を強く感じていたと思われる。

そのをりの蓬がもとの枕にもかくこそ虫の音には陸れめ(七七五)

臨終の時、その枕辺にも虫がしきりに鳴く。その瞬間を詠む厳しいまでの無常観が感じられる。

・はかなしやあだに命の露消えて野辺に我身のおくりおくらん(七六四)

・露の玉は消ゆれば又もおく物をたのみもなきは我身なりけり(七六五)

・月をみていづれの年の秋までかこの世に我がちぎりあるらむ(七七三)

・何處にか眠りくゝて仆れ伏さんとおもふ悲しき道芝の露(八四四)

・死にて伏さん苔のむしろを思ふよりかねて知らる、岩陰の露(八五〇)

しかし、彼の無常観にはまた、限りない感傷が漂っている。

津の国の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり(『新古今集』六二五)

難波は平安朝の貴族にとつて美しい歌の題材であった。しかし彼は、その難波の青い海や芦の美しさを詠まず、

「春は夢なれや」と否定し、芦の「枯葉」に焦点を合わせて、隠遁者としての心を表わさんとしているが、その

無常観の中に何ともいえない感傷がみられる。同じように感傷の漂う歌を挙げる。

・ 木枯に木の葉の落つる山里はなみだこそさへもろくなりけれ（九三五）

・ あかつきのあらしに比ふ鐘のおとを心のそこにこたへてぞ聞く（九三八）

・ 待たれつる入相の鐘のおとす也明日もやあらば聞かんとすらん（九三八）

これらの歌は、彼自身の切迫した真情が滲み、単に無常を感じ感傷を詠んでいるのではなく、その無常・感傷の中に彼の胸中の苦悩がうかがえるのである。

このように見てくると、西行は、無常観は持っていたであろうが、それよりもむしろ、無常を捉えた歌人と言っているのではなからうか。そして、この無常観を持っているのではなく無常を捉えるというのは、単に客観的立場をとるのではなく、また理念としての無常観を持っていたのではなく、自己自身の主体としてこの世を無常と捉えたということである。すなわち、「この世は無常である」ということを知らなくても、彼は「この世は無常である」と捉えたであろうということである。

五

では、西行は隱遁者としては失格者であったのであろうか。このことは軽々に判断すべきではなからうが、石田吉貞氏は、隱遁の主要な点として

一、無常観

二、孤独と自然

三、信仰と美

四、閑寂

五、美的安心

の五点を挙げておられる。⁽⁵⁾今はこの五点を紹介するのみにしておくが、この点からみれば、西行もまた、やはり
隱遁者の粹をはみ出るものではないと考えるのである。⁽⁶⁾

しかしまた、先述した如く、西行は自己自身を厳しくみつめ、その胸の内に宿る矛盾に苦悩し、そしてそれを
素直に歌に吐露する。この点のみにおいてさえ、彼は充分に遁世者としての立場に立っている、と言うよりは、
遁世者そのもののすがたを認めるのである。

身をすつる人はまことにすつるかはすてぬひとこそすつるなりけり（『詞華集』⁽⁷⁾三七一・読人不知）

西行最初の勅撰集入集歌であり、「無明即菩提」の考えを詠んでいるが、これこそ西行の遁世者としての根底で
あり、また、真の遁世者のすがたを言いええているであろう。

結 び

鴨長明は、『方丈記』で言うところに従つて考えるに、彼は天変地異に出会い、無常の世たる世俗を逃れ、精神的自由を求めて出家した。そして、その精神的自由は閑居にあることを悟り、閑居の生活に安住した。それはまさに、「住まずして、誰か悟らん」と高らかに言い放つほどの、すばらしいものであった。しかし、やがて彼は、仏道修行者であるはずの自分が、草庵に安住し、文をものし、和歌を詠み、琴を奏でていることの矛盾に気づき、もし貧賤の報のみづから悩ますか。はたまた、妄心のいたりて、狂せるか。その時、心さらに答ふる事なし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請の阿弥陀仏、両三遍申して、やみぬ。

と、どうにもならなくなつて黙るしかなくなつてしまふのである。つまり、長明は、知識人としての立場と仏道修行者としての立場とのはざまに立つて、どうしようもなくなり、苦悩するしかなかったのである。仏を請ういとまもなく念仏をとなえるしかないほどに追い込まれたその苦悩は、彼がわが心を見つめた結果がもたらしたものであること、言うまでもない。なお、長明はその後『発心集』を著わしているが、『発心集』を『方丈記』末尾からの発展ととらえることはやはり無理であり、長明の苦悩は解決されずに終つたと言わざるをえない。⁽⁹⁾

平安末期から中世初頭にかけての動乱を体験し、世の中の大きな変動を体験した西行・長明に対して、兼好は彼らより百年以上も後の時代に生きた。したがつて、兼好にとつては、生れた時からすでに動乱の世であり、

無常の世であった。ゆえに彼は、動乱を、この世に当然あるものとしてみつめることが出来、生まれた時から当然この世は無常であると受けとめることが出来た。そのように冷静にみつめることが出来たがゆえに、彼の無常観には、西行・長明ほど切迫したものがなく、また冷静に無常の世をみつめることが出来たことが、

兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ、身をも忘る。世を背ける草の庵には、閑に水石をもてあそびて、これを余所に聞くと思へるは、いとかなし。しづかなる山の奥、無常のかたき競ひ来らざんや。その死にのぞめる事、軍の陣に進めるに同じ。〔徒然草¹⁰〕第一三七段〕

と、無常はどこへもやってくることを彼に認識させ、さらに、無常から逃れることは不可能であるから、

人、死を憎まば、生を愛すべし、存命の喜び、日々に楽しまざらんや。(同・第九三段)

と、生ある間を精一杯生ききかれと彼は主張する。また、人間性を肯定し、ものごとくに執着することなく精神的自由を持つて生ある間を生ききるべきであるのに、なぜ人間はするように生きないのかを考え、

人皆生を楽しまざるは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘る、なり。(同・

第九三段)

と、死の迫っていることを認識することによって生が凝視されるのだと主張する。また、人間性を肯定し、ひたぶるになって余裕を失うことなく、精神的自由をもって生ききかれと主張するところに、人間を深くみつめる兼好を知るのである。⁽¹¹⁾

それでは西行はどうであったか。西行は動乱の世、すなわち無常に出会い、その中にある自分自身をみつめ、

わが心をつめて出家した。西行の出家の理由がわからないことこそ、彼がわが身、わが心をつめたことにはかならない。失恋原因説などるにたらないもので、無常の世にあって自己凝視を通して徐々に高まりつつあった出家への思いを出家へとふみきらせた「契機」と考えることは出来ても、そのようなことが出家の「理由」とはならないのである。さて、わが身、わが心をつめた西行には和歌があった。彼における和歌は趣味に終ることなく、和歌によって自己をみつめ、わが心をつめ、苦悩した。あるいは、わが心を詠むことによって、わが心をふりかえり、あるいは自然という美を詠むことによって、それに比して余りに醜いわが心を痛感した。そうして、苦悩し、苦悩した結果、庵にいても精神的に落ち着くことが出来ず、旅へと駆りたてられたのである。

最後はやや踏み出し過ぎたもの言いになってしまったが、言い過ぎついでに言えば、西行にとって、和歌とはわが心を映し出す鏡であったのではないか。彼にとって、和歌を詠むということはすなわちわが心をつめることにほかならず、それはとりもなおさず彼における仏道修行であったのではないか。この点については、冒頭に述べたように、次稿で明らかにしたい。

注

(1) 『山家集』および『新古今集』は、日本古典文学大系本(岩波書店)による。歌番号も同じ。

(2) 蕪村に「あちらむきに鳴も立ちたり秋の暮」の句があり、『も、すも、』にも「鶯も鳥もあちらむきゐる」と詠んでいる。また蕪村の友人の竹溪が京を發つ時の離別の句に「たつ鳴にねむる鳴あり二法師」とあり、この「たつ」は明らかに「立ち去る」意である。とすれば、先の蕪村の句の「立つ」も同意と考えられる。すなわち、これらの句は、「あちらむき」とあるのも併せて、厳しい孤独感を詠んだものといえよう。種田山頭火にも「からすがだまって飛んでいった」の句があ

り、西行の「心なき……」の歌がどのように受けとられたかを知って、興味深い。

- (3) 「心なき身」について、古典文学大系『山家集』の頭注では「物のあはれを解せぬ世捨人の自分にも」とあり、同じく古典文学大系『新古今集』(三六二)の頭注は「世を逃れて愛憎悲喜の心を捨てた我が身」と解する。久保田淳氏は諸説を検討された上で、「物の情趣を解しない身」とされ、「西行は謙遜してこのように歌ったと考える」と言われる。さらに「しかしその際、西行の裡に……(中略)……法師の境涯への自嘲の念、自己否定的な感情が働いていたと考えるのは、やはり近代的な受け取り方ではないか」と述べておられる。(『新古今和歌集全評釈』第二卷・三五四―三五六頁)
- (4) 西行の法名「円位」は天台田教六位の証果を願うところからのものだろう。彼は仏教宗派について、かなり自由な態度をとっていたと考えられる。

- (5) 同氏著『隠者の文学——苦悶する美——』五四―一〇〇頁。(瑞新書一七・一九六九年一月発行)

- (6) 同じく石田吉貞氏は、隠遁者としての西行の内部生活を、無常・孤独からくるさびしさ・従順・強い感傷性・自然との関係・美的安心の六点からとらえておられる。(5)に同じ。一二五頁)

- (7) 『詞華集』は『新編国歌大観 第一卷 勅撰集編』による。

- (8) 『方丈記』は角川文庫本による。

- (9) 拙稿「不請の阿弥陀仏」私考」(『同朋仏教』第二十・二十一合併号・昭和六一年五月) 参照。

- (10) 『徒然草』は日本古典文学大系本(岩波書店)による。

- (11) 拙稿「栗を食ふ娘」の話——『徒然草』第四十段をめぐって——(『同朋大学論叢』第四十四・四十五合併号・昭和五六年六月) 参照。

沼波 政保 (本学教授・日本文学(中世))